

道

m i c h i



5

2023 No. 60

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

真の強者

今日口を開けば社会悪を言って嘆くが、まったく至るところ悪人が多過ぎるからである。吾々の経路を振り返ってみると悪人との闘争史であるといってもいいほど常に悪人からイジめられている。ところが悪人の心理をよく解剖してみると、決して無意識にやるのではない、承知の上でやっているのである。兇悪無類の大悪人は別だが、大多数の悪人は悪いことはいけないと知りつつ、金が欲しい酒も女もいろいろな物が欲しい結果、つい悪の道へ飛び込んでしまう。いったん悪の道へ入ると容易に抜け切れないのが一般悪人の通念である。

勿論、法律は怖い、ということは知っていても、真面目では容易に欲望を充たせ得られないから、法に触れないよう、人に見られないようと細心の注意を払い苦心惨澹する。勿論嘘でも誤魔化しでも、できるだけ巧妙にやるというわけで、漸次時の進むに従い技能はますます発達するため、うまく人を騙すくらいなど朝飯前ということになる。ところで騙される方は善人が多いから諦めてしまう。これをいいことにしてますます悪事を行うとともに、この域に達すると真面目なことよりも悪の方が手っとり早く成績を挙げるというわけになる。こうなったのはなかなか足を洗うどころか漸次泥沼へはまり込んでしまう。勿論この種の悪人は智能犯であるから比較的中流以上に多いのも事実である。

そうして人間は誰しも何らかの癖をもっているもので、昔から人は無くて七癖という言葉があるくらいだ。悪事は人を苦しめ不幸に陥し罪を作るということは、さすがに悪人でも気は尤めるに違いない。また酒を飲む癖もよけいな散財をし、生活も苦しくなり妻子にも泣きを見せ、かわいそうだと知っている。また女が欲しいがよけいな金を使わなければならないし悪質な病気を背負う危険もあり、親や妻に心配をかけることも分かっている。博打や賭事をする^{ぼくち かけごと}と損することの方が多^{おと}いこと等、悪いことはよく知りながら、どうしてもやめられない、制えることができない、というのはほとんど経験のない人はあるまい。私の言いたいのはこの点である。

悪いと知りながら制えることができないというのは、制えつける力すなわち真の勇氣が足りないからである。この勇氣こそ人間の最も尊いものである。私は常に人間向上すれば神となるということを言うが、この悪い事と知れば、それをピッタリ制御してしまつて、悪には絶対負けないという心の持主こそその人は立派な神格者となったのである。まったくこの力こそ真の力で、こういう力が本当の観音力である。

以上の意味によって、「弱きものよ、汝の名は悪人なり」と私はいうが、右によって了解さるるであろう。

(「光」33号 昭和24年10月29日)

国宝 色絵藤花文茶壺 野々村仁清 江戸時代(17世紀)
MOA美術館所蔵



野々村仁清(生没年不詳)は丹波国桑田郡野々村(現、京都府南丹市美山町)の出で、本名を清右衛門という。瀬戸で轆轤(ろくろ)の修行を積み、洛西の仁和寺(にんなじ)門前に御室(おむろ)窯を開いた。「仁清」という号は、仁和寺の仁と清右衛門の清を合わせたもので、仁和寺を中心とする貴顕たちと交流を深め、それらの人々の求めに応じて華麗で典雅な作品を数多く残している。特に、後水尾院(ごみずおいん)を中心にした宮廷サロンとの仲介役をなした茶人金森宗和(かなもりそうわ)とのかかわりの中で、野々村仁清は優美な陶器を次々と生み出した。仁清の作品は、巧みな轆轤の技術と華麗や上絵付けに支えられた、茶壺、水指(みずさし)、茶碗、香炉、香合などの茶道具で占められているが、その代表作といわれるものが色絵の茶壺である。藤花文の本作は、仁清の茶壺の中でも最高の傑作として名高く、京風文化の象徴的作品ともいえる。温かみのある白釉地の上に、咲き盛る藤花が巧みな構図で描かれており、花穂と蔓は赤・金・銀などで彩られ、緑の葉には一枚一枚葉脈を施している。総体が均等に挽(ひ)き上げられた端正な姿は、色絵の文様とほどよく調和しており、下部の土見(つちみ)も壺全体をバランスをよく保っている。底裏に「仁清」の小判形の大印が捺されている。

丸亀藩・京極家(きょうごくけ)伝来 (MOA美術館・箱根美術館 名作美術品カレンダーより)

《目次》

代表挨拶	4
感謝奉告①	12
五月度聖地行事・ご面会	14
月次祭	15
感謝奉告②	16
トピック・お知らせ	17
感謝奉告③	18
シリーズ明主様(4)少年期の思い出	21
ブラジル信徒の信仰体験談	22
【21世紀を生きる】(8)	25

令和5年 課題

われよしの 心浄(きよ)めて ひとよかれと

祈る心は 神に通へる

〳明主様の示された「道」を求め、まつすぐ歩む〵

代表挨拶

西村 正資

天国てんごくの 花はなにやあらむ高山たかやまの

巖いわを綴つづりてさつき咲さくなり

(昭和二四年八月一日 明主様詠)

風薫る季節となりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

今年の花は、春の風に吹かれてみな先を急ぐようです。水晶殿下のつつじは、五月の月次祭を待たずに早

や遠くに進みました。

執務棟山手では、藤が満開を迎え、「天子到来」にたなびくという紫雲を予感させ、私達を癒してくれていました。気づくと既にどこかへ移り去っていました。次はさつきの出番と楽しみにしています。

テレビ報道で知ることですが、このような季節の早い訪れは、世界中至る所で見られ、人々を驚かせ、歓迎すべきこともあれば、時には自然災害も発生させているようです。

私には、神様が地上天国の創造を、大変お急ぎであるように思えてなりません。自然環境の変化や異変に対応することを求めるのも大切なことだと思いますが、私達信仰者としては、時にしっかりと立ち止まり、夫々の立場において、み教えに照らし一瞬の変化のその奥に存在する「神様の御心を訪ねる」という営みをさせていただくことも大切なのではないでしょうか。

『地上天国祭』をお迎えするにあたって

六月一五日『地上天国祭』は、一年の信仰生活の半ば折り返しに当たります。

機関誌「道」二月号(No.57)においては、み教えに基づき、神様の定めとして「立春祭」と「地上天国祭」の意味についてふれさせていただきました。

そこでは、「靈界における夜昼轉換が進捗し、特に六月一五日の節というのは、火素が増え靈界が明るくなること」「人々の魂を輝かすための浄化作用が強くなること」等を学ばせていただきました。

今年信仰課題として掲げさせていただいたのは、

『われよしの 心浄めてひとよかれと 祈る心は神に通へる』です。

ひとりひとりが「み教え」拜読を通して、明主様の御心に触れ、利他への生活改善と共に、救済力「浄霊」をもって積徳に努め、天国人に相応しいお互いに成長することを目指しております。

これは、誰も代わることでできない大切な自分の人生の最終目的なのだと思えられています。

地上天国祭を迎えるにあたり、他者に優しい自分をイメージし、人生の質をさらに整えさせていただきました。

明主様無くして、世界平和の実現は困難

明主様の力をお借りすれば、すべての人が優しくなれます。

専従当初、教会から香港に二年半布教派遣されたことがあります。二年早く先輩の村上氏が開拓していただきましたので、すでに何人かの信徒が誕生していました。

その中の呉(ン)さんという五〇代のご婦人は、熱心に毎日参拝にいられていました。ある時、陳(チャン)さんという七〇代の婦人をご案内されました。御神体や室内を興味深く観察され、「元気だから」と、浄霊は受けてお帰られました。翌日も同じようにお越しになり帰られました。四、五目目に浄霊を受けられ、掌をしげしげと見つめてお帰りになりました。その後おひとりでお越しになった時、「陳さんは、なぜここを訪ねて来られたのですか？」と尋ねたところ、「呉は、古くからの友人ではあるが、とても悪い人間で信用できない。しかし、ここにお参りするようになってから良い人間になった。どんなところか興味があつて見に来た」ということでした。元々二人とも某信仰の熱心な信者でもありません。

私達は香港の言語広東語は、日常の必要最少しか話せませんでした。人の心に触れるような、神様に関する深い話などできるわけがありません。ただ、顔を見てニコツと笑い、気持ち良く浄霊を取り次ぐのが精一杯でした。

しかし、気づいたのです。「浄霊」によつて呉さんの生き方が向上していったのです。私は、それまで浄霊による病を救う体験はあり、明主様のお力に対し、疑う余地のない思いでおりましたが「浄霊のみで人格が向上する！」というのは初めての体験でした。

教本を読み、教えに導かれ、自己錬磨に努めることも欠くことのできない大切な行為ですが、突き詰めていけば「言葉の伴わない救いでなければ世界の隅々まで救うことは不可能だ」「この浄霊でなければ世界に平和はやって来ない」「救いの実現は理屈や言葉より「力」だ」と、その時確信したのでした。

世界平和の源である一人一人の内面に、『ひとよかれと祈る心』という美しい魂の実現をはかる。これはいつでもどこでも、そして誰でも、浄霊を取り次ぐことで可能になるということです。

そうした「凄い力を自分は与えられていた」のだと、新たな思いで浄霊を見つめ直したことでした。

宗教と科学をつなぐ浄霊研究

九州大学名誉教授の山本健二氏は、『浄霊の力は本当に実在するのか』『浄霊の力は有益な効果をもたらすのか』という課題をもって、ヒト培養細胞を使った研究やヒトを使った研究を、「おひかり」の有無や「浄霊」取り次ぎの有無等、さまざまな角度から研究と実験を重ねています。

そこで得たデータをもち、

「岡田茂吉教祖が説かれた『観音力の御守りを首に掛けるべし、おひかり』無くしては、世界救世教の根

幹である「人類救済」はなし得ない』とのみ教えに一致していると考えられます」

と、結論を出され、「浄霊は宗教でもあり、科学でもある」との研究結果を学会等において発表されています。

「明主様は創造者」古の聖者をも活かす

古(いにしえ)の聖者は、尊くて素晴らしい存在です。しかし、人々や社会を護り、多くの人々から尊崇されましたが、理想世界を造ることはできませんでした。厳密に言えば、その「力」が無かったと、数千年の歴史が物語っているのではないのでしょうか。

『結局力です。(中略)キリストにしる釈迦にしる力がないのです。だから理窟はいろいろうまく説くが、実際の力がないから、本当に救えなかったのです。というのは夜の世界ですから、今までの力は月の力ですから、ごく弱かったのです。だから極楽や天国を造ろうと思っても、どうしても邪神に邪魔されて、思うようにゆかなかったわけです。ところが今度神様は私にその力を与えられてますから、それはなによりも、弟子がキリストと同じような奇蹟を盛んに現わすのでも明らかです。キリストを作る力ですから、それは大きなものです』(御教え集二三号 昭和二八年六月一六日)

明主様対談…アジャヤシーン東京特派員 デイック・中村氏、

…ラジオ東京アナウンサー 真山照政氏

明主様 『光』という字を書くとその中に光が入って行くのです。

真山氏 それは教祖だけがおやりになられるわけで…。

明主様 そうです。それだけの能力を神様から与えられてるのです。

真山氏 その神様というのは……。

明主様 主神と言いますが、最高の神様です。最近の事ですが、或る人にキリストが憑って、この神様によって救われてます。

中村氏 『光』という字ですか……。

明主様 (御守様を御見せになられ)

これを一枚六秒で書くのです。ですから、とても早いです。これを懐に入れた刹那から病気を治せるのです。

真山氏 そうすると、何時も神様が教祖の体に宿っているわけでございますか……。

明主様 そうです。此処にいるのです。

真山氏 教祖の『光』というのは、世界的には教祖御一人という事になるのですか……。

明主様 そうです。昔からないので。人類始まって以来初めてです。

真山氏 併し教祖がなくなると、後、救世教はどういうことになりますので……。

明主様 霊界から働きますから、何でもありません。

(栄光二六七号 昭和二九年七月二八日)

「浄霊」は、私達の夢と希望を現実のものにしてくれるとは、思えません。正しい祈りを持ちさえすれば、何ごとの修業もせず、努力らしきことがなくても、与え許される「浄霊力」です。これが、明主様の力です。皆様は、ご自身の体験や機関誌「道」に掲載された感謝奉告を通して、前記した『明主様お言葉』を「そうだ！」と、確信し受け止められたことと拝察いたします。

機関誌『道』四月号、感謝奉告より学ぶ

土佐みろく教会のHHさんは、まさに明主様が期待された「道」をまつすぐに歩まれています。

突然、神戸在住の姪から、「主人が難病にかかり、『半身不随、寝たきりの生活になります』と、医師から告げられた。助けて！」と電話があったそうです。

どんな人でも苦しい時は「神様助けて！」と叫ぶものです。世間では「苦しい時の神頼み」と言いますが、魂が生みの親である神の存在を感じているからではな

いかと思います。

Hさんは、直ぐにご祈願され、遠隔からの浄霊を取り次がれました。なんと翌日には医師から「大丈夫、歩けるようになります。リハビリに」と、一日でご守護を許され、姪の主人も思わず「神様ありがとう」と口にしたそうです。

この姪御さん夫婦も、今回のことで、以前より夫婦仲が良くなられた様子で、厳しいと思われた浄化が一転、天国家庭の入口となりました。

この一連の流れに、私達信徒のあるべき一つの姿が見えるように思いました。Hさんは、普段から困る人を見遇ごすことなく、直ぐにご浄霊を伝えていきます。ご自宅には、大勢のお友達が何時も出入りされているようで、素晴らしいところは、ほとんどの方に浄霊の取り次ぎをされていることです。「浄霊は太陽の光、朝日をあびましょう。美男美女になり、健康になります」と、取り次いでいらっしやいます。とても良い言葉です。その姿から「神様が使っているいいよと天下の宝刀（浄霊）をお貸し下さったのに、それを使わないなんてありえないでしょう。もったいない」との思いも伝わってくるようです。

「良いものは皆におすそ分けしなければ」と、そこに優しい人柄も感じます。

ご自宅にお越しになる友人達、おそらく遊びに来る

のではなく、実際はHさんのご浄霊が目的で来ているのではないのでしょうか。きっと心地よく安心を感じているのです。その姿に感応された明主様から、明らかにご守護を賜るのではないのでしょうか。

大阪グループのNMさんです。ご自身小学四年生の頃まで激しい小児喘息で、発作に苦しまれていたそうです。高校生になり、救世教の先生から気管支喘息で苦しむ女性の浄霊を依頼され出掛けました。取り次ぎが終り、お玉串と共に「空気御礼」と書かれた封筒を預り、怪訝（げげん）に思い、先生にお届けした時、その意味を尋ねています。先生は「その方の浄化は大変厳しく、発作が起きると呼吸さえ困難になる。浄霊をいただくのと楽になり、乗り越えてきた。何気なく呼吸でき、息が出来ることがいかにありがたいか。その感謝と喜びを込め、真心の「空気御礼」を相当の期間継続し、捧げておられる」と知らされ、明主様信仰とは、このような謙虚で崇高なことかと、貴重な体験を今も大切にし、感謝されています。

NMさん自身、小児喘息を患い苦しまれた経験があり、一層「空気御礼」に共感されたのでしよう。「人間生きていくだけで丸儲け」とは、明石家さんま氏の常套句ですが、まったくその通りと思えてきました。

私も感謝献金をお捧げするとき、「何の感謝？」と、

聞かれて直ぐに応えられない、心の定まらない献金を捧げていることがあります。せつかくの神様へのご献金の尊さが減じてしまうことがあるかもしれませぬ。神様は、ご献金に込められた心を一番楽しみにされているのではないのでしょうか。『空気への感謝』、凄いやりと感じ、緊張感を覚えました。

また、私は自分の体験から、喘息で入信された方は、喘息の方と触れ合い、トラブルで入信された方は、同じような苦しみを抱える方と出会うということをよく見てきました。つまりこれが神の愛でありご縁で、『そこで学びなさい』、『そこで社会や周囲に御恩返ししなさい』ということではないでしょうか。

また、収入の一割献金を四〇年継続されている女性信徒の信仰をご自身の学びとして報告されています。

就職して受け取った初めての給与、その時両親にお小遣いを手渡されたそうですが、お父さんは嬉しくて「有難いことだけど、これを献金したら」と、言われたことがきっかけだったそうです。「仕事や生活の中で必ず不平や不満等、一割くらいの曇りを作っている。だから献金させていただくのだ」と仰り、父親も実践されていたそうです。

素晴らしい親子ですね。そのお蔭か、親の代も娘の代も、これまでとても穏やかに過ごして来られたそうです。

この報告に接し、私はみ教えにも掲載されている米国のロックフェラー氏の「一割献金を思い出し、ネットで調べました。」

氏は、石油の事業で一大成功を収めました。しかし富の集中で社会から批判が起こり、熱心なクリスチャンの母の教えを受け「社会への還元」に気づき、実行しました。その母の教えの一部ですが「実の親以上に、神に仕えなさい」「右のポケットには、常に十分の一献金を用意していなさい」「朝は、いつもその日の目標を立て、神様の御前で祈りを捧げなさい」「他人を助ける力がある時は、精一杯助けなさい」他、です。彼は、九七歳で没するまで多大な社会貢献を継続し、世界有数の財閥を創立しました。

「継続は力なり」と言いますが、善行の何か一つでも徹底して実行できれば、素晴らしい人生が開けるのではないのでしょうか。

古賀集会所のHAさんは、本誌でも何度か報告をされています。その都度、人生の質が上がり、人としても大きく成長されているように感じます。

不遇な生い立ちから、大きな借財をつくり、人生を諦める寸前に信仰仲間との出会いをいただき、周囲の信徒の献身的な支えで、就職され、そして借金を完済、そこで満足するのではなく、両親含め家族のご遺骨が、

分散していろいろな所に預けられていました。そのことに気づき、この度、お墓の建立が叶い、無事納骨を済ませることができたという報告でした。

ご先祖様方も大きな喜びで、きつと感謝されていることでしょう。その証が、ほとんど音信不通になっていたお姉さんとの交流が復活し、Aさんに「普通の人にはできない。ありがとう」と、感謝してくれたことです。ひとつが整うことで、他の多くのことにも良い影響が及びます。

良い信仰仲間に出会い、支えられましたね。誰しもプライドがあり、我や執着が棒のようにあります。素直が一等” 皆の助言を聞き入れるということが、Hさんの幸福の道を開きました。

最後に報告されているように「今後、もし同じような境遇の方が現れたら、この信仰に導いて助けてあげられるような人間になりたいです」。これは「自分のために」という人生から「人様のために」という人生の大きな成長の転換点であり、祈っていて下さった方々や社会に対するご恩返しです。神様も大変お喜びになり、それでこそ今の幸せが本物（神様からの借り物から自分のもの）になるのだと思います。

そのような決意と祈りをもち続ければ、必ずや同じ境遇の方が引き寄せられてくると信じます。

今後の活躍を、楽しみにさせていただきます。

今年の当会課題（副題）は、

『明主様の示された「道」をまっすぐ歩む』です。

来月の地上天国祭には、明主様の御許（みもと）に参集し、ご一緒に世界の安寧と友人知人の幸せをお祈りし、聖地から「おひかり」を、お届けさせていただくではありませんか。

また、六月一五日の祭典終了後には、執務棟において、恒例の「明主様と聖地に直結する会 信徒集会」を開催いたします。

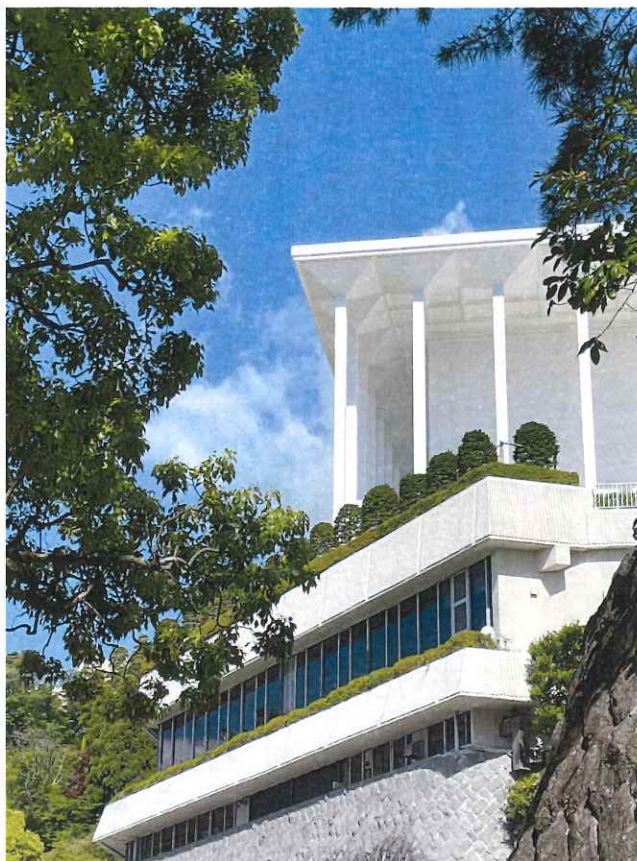
皆様にお会いできることを、楽しみにいたしております。



聖地NOW

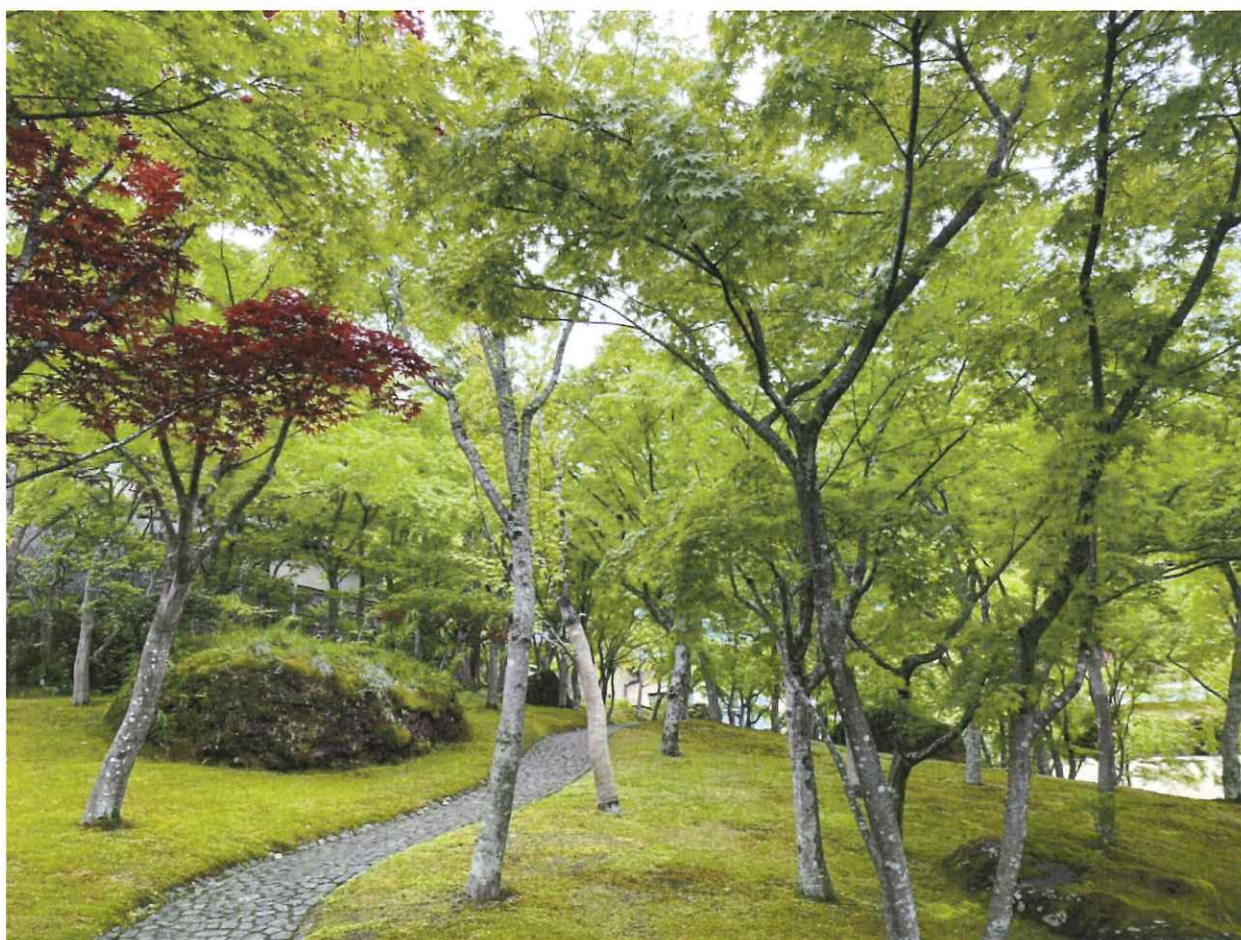


MOA美術館の紫陽花



青空に映える救世会館

5月は鮮やかな青と緑の世界が広がる



鮮やかな新緑。神仙郷の苔庭

感謝奉告 ①

ご浄化の度に向上が許されて

今度は金属アレルギーの息子にご守護

徳島グループ M K

二〇二二年一月一日に腰痛軽減の御守護をいただき、二〇二三年一月の「道」で感謝報告をさせていただきましたが、その時いただいたもう一つのご守護、さらに息子にいただいたご守護についてご報告させていただきます。

三月二日に太田先生にお越しいただいて、五、六人の参加者のご浄霊とお話をいただく予定でしたが、参加者の都合がつかず太田先生と家族だけとなりました。先般の浄化のことも含め色々お話をすることができました。その中で、この度の浄化が必要不可欠なものであったことに気づかされたのです。

腰痛軽減のご守護をいただいた後、嫁いでいる娘が「しばらくうちに来て養生するように」と言ってくれました。自分も体調が万全ではないので、娘の家に行

くことを決めました。

しかし、心配なのは一人残される息子のことでした。息子の日常生活は、ほとんど私が面倒を見ていたので「果たしてひとりになってやっていけるのだろうか」と考えると心配でした。息子は以前から、物事へのこだわりが強い時があり、精神的に追い詰められる状況に陥ることがあったからです。

息子（Y）は、以前から金属に対するアレルギーのような症状が長年続いており、特に掃除機のような電気製品、食卓のスプーンやナイフ、また、硬貨等、一切手にすることは出来ませんでした。また、私自身が恐ろしいと感じたことは、自分の思いが通らない時は、暴力的な行動に出る事もしばしばあったのです。私の腰痛がひどくなったのは、まさに息子の状態が悪くなっている時でした。しかし、自分の身体の状態を考えると、娘のところへ行くしかないと決心して行きました。娘宅では安静にして、娘からご浄霊もいただきながら過ごしました。娘の夫も優しく接してくれましたので、私自身は安心して養生できました。

娘の嫁ぎ先は、四〇〇頭余の牛を飼っている酪農家です。座る暇もないように忙しくしている娘の様子を目の当たりにし、身体を心配してしまいます。忙しい時でも娘は、食事を持って毎日のように息子の様子を見に行ってくれました。機械や金属などへの恐怖心も

あり洗濯機など使ったこともない息子ですが、何とか一人で生活ができていたようでした。

その間、グループの皆さんや私自身も、毎日のご祈願と遠隔浄霊を徹底して取り組ませていただきました。半月程、娘のところへ世話になり、家に帰ると、私がお家を留守にする前の息子とは別人のようになっていました。洗濯機や掃除機等を使って、自分自身で日常生活をきちんとしていたのです。また、私に対しても優しく色々世話をしてくれるのです。これは、私が思ってもいないことでした。息子の浄化と私の浄化、これらは与えられるべくして明主様が私達に与えてくださった浄化であり、そして御守護であつたのです。

さらに、四月二〇日のことです。私がデイサービスから帰つてくると、「腹が痛いので病院へ行く。保険証を出してほしい」と息子が言うのです。今まで何年も病院へ行ったことのない息子です。带状疱疹になつた時にも、ご浄霊だけで回復した息子が、「病院へ行きたい」とは思ひもよらない言葉です。聞くと、昨夜から腹が痛いと言います。近所の病院へ行ってエコー検査などで調べてもらおうと胆石が二つあると言われ、しかも放っておくと命にかかわるとの事でした。

そして、県立中央病院への紹介状を書くので、明日取りに来るように言われました。その夜も、御神前のご浄霊のお取次ぎをさせていただきました。

翌日、紹介状を持って県立中央病院へ行き、内視鏡検査など再度検査を受けると胆石はなくなっており、何も見つからなかつたのです。痛みもなくなつていました。しかし、病院では、その他詳しく検査をするので入院してくださいと言われました。そして一週間入院し検査しましたが、何の異常もなく退院しました。

これは病院にも行かず、市から通知が来る健康診断も受けたことのない息子に与えられた浄化であり、ご浄霊とご祈願の大切さを、明主様から見せられたご守護だと思いました。

皆様のご祈願、ご浄霊そして、大神様、明主様のみ光をいただくことによつて、今まで以上に心豊かな日常生活を送ることができるようになりました。

二ヶ月ほど我が家での浄霊会は休みましたが、その後は一〇人余が集まつて浄霊会を再開させていただいております。

浄霊会を開催させていただくということは、我が家に信者さんたちを通して明主様が多くのみ光を運んでくれることだと息子は言います。本当にみ光に包まれているのだという思いでいっぱいです。

大神様、明主様、信者の皆様ありがとうございます。

この度の浄化、そしてご守護のすべては、大神様、明主様のお導きによるものであると再認識させていただきました。感謝申し上げます。

五月度ご面会

建設の槌音と共に進む明主様の御神業（箱根）



世界的大浄化時代に、光の根源地から救いの拡大が進められていく



「下津磐根に宮柱太しき建て」紫微宮建設現場から巨岩が現われる

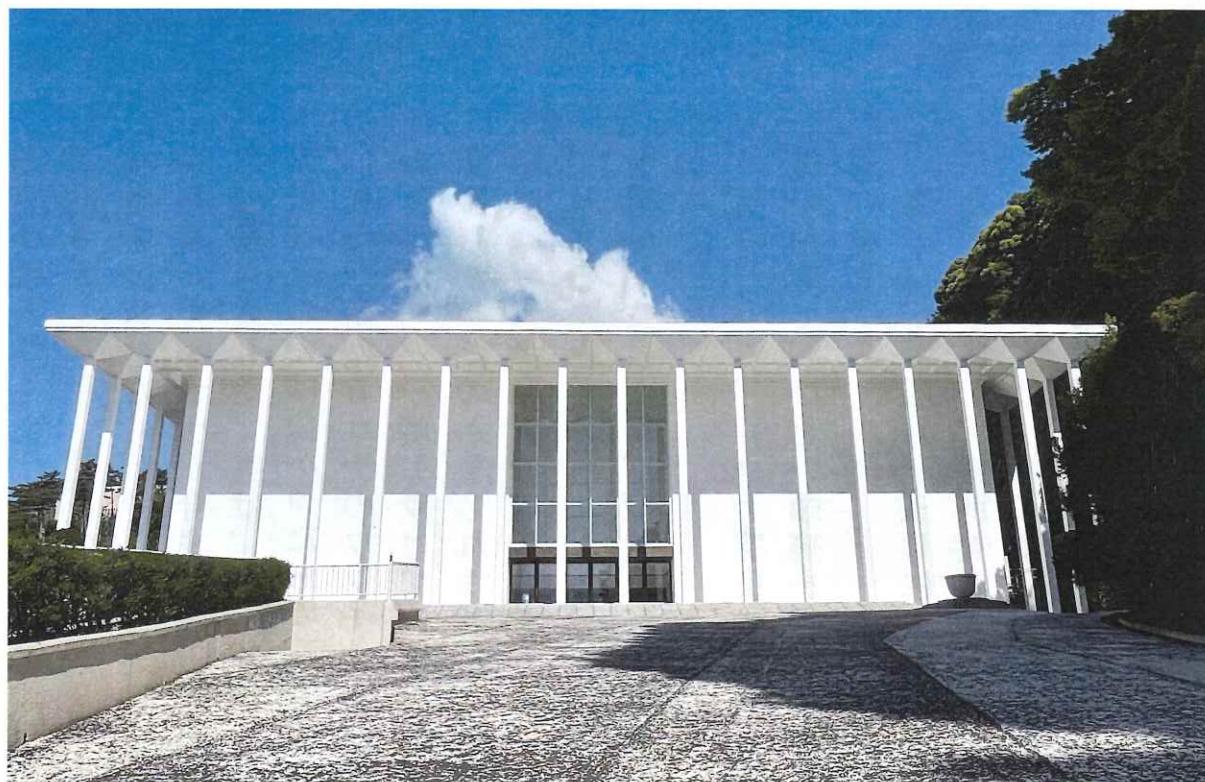
今年の地上天国祭は、神仙郷完成から70年を迎える節目にあたる。
一人ひとり、明主様の人間観に基づく生き方を求めて一層の向上を目指す

五月度月次祭

初夏の青空のもと神業宣布(熱海)



ようやく訪れつつある平常。御神業も本格的展開に。



白亜の殿堂と青空のコントラストが参拝者への一層のおもてなし

浄霊、自然農法・自然食、いけばな山月・高い芸術 = 救いの三本柱
を通して地上天国建設という明主様のご理想実現に地道に挑む

感謝奉告 ②

コロナ感染症、私の場合

浜松布教所 E Y

この一月、新型コロナウイルスに感染した話をご報告します。一月五日の朝、だるくて、なかなか起きられず、体温が37度台でした。そこで、抗原検査キットを使って調べたところ陰性でした。翌日は38度台になり、再び検査キットで検査してみたら、今度は陽性でした。その日は熱が39・1度まで上がり、頭痛がひどく、頭の中をキリで刺されるような痛みがありました。「イタタ！」と言う中で自己浄霊をすると痛みが軽くなり、そのうちに、また、痛み出すという状態を繰り返し、下痢もしていました。

一月七日の朝まで、頭の激痛がありました。八日の朝、急に楽になりました。熱は37・1度まで下がりました。しかし、その後も、何か食べると腹痛を生じ、あまり食べられませんでした。

発症してから五日目の一月一〇日の夕食から、普通に食べられるようになりました。それから、二〜三週間、かなりのだるさが続きましたが、その後は、だ

るさが取れました。後遺症としては、せきが出る状態が続きましたが、今では、そういうこともありません。味覚の障害はなく、それと反対に、感染後、少ししてから食べたバナナが今まで以上に美味しく感じることに驚きました。実は、私はバナナが、それほど好きな食べものではなかったものですから……。

私は、新型コロナウイルスのワクチンを受ける気がしないものですから、一度も受けていません。そのため、症状が激しかったのかもしれない。医者をしている弟からは「コロナ患者で症状の激しいのは三割。それに当てはまる」と言われました。ワクチンを受けてきた妻も感染しましたが、症状は私よりも、ずっと軽かったようでした。

私にとって、コロナ感染は激しい浄化でしたが、浄霊のお蔭で、ひどい頭痛を乗り越えることができたと思います。

妻の母が、四月一五日に亡くなりました。八七歳でした。五年ほど、特別養護老人ホームに入っていて、ここ一ヶ月位は、特に体調不良が続いていました。しかし、お蔭様で、おだやかな表情の義母を送ることができました。亡くなった人の顔というより、眠っているような、今にも起きだしそうな表情でした。信仰で明主様のみ救いに繋がっている有難さを感じることできました。ありがとうございました。



愛媛県久万高原 長田相互製材所

「道」一月号(No.56)の長田康恵さんの体験奉告の中に登場し、九死に一生を得られた息子の長田昇二さんが愛媛新聞に取り上げられました。次女の塩田早希子さんが「大切に育てられた久万高原の木のぬくもりを感じてもらいたい」とヒノキ、スギを使ったメモリアルグッズを考案したことを取り上げられた記事です。「子供の誕生、成長の節目に、温かみを感じ取れる最適の素材を」と、自信をもって紹介。

6月6日

平安郷参拝のご案内

当日の11時、平安郷・春秋庵にて、聖地直結の会メンバーで揃ってご参拝させていただきます。その後、西村代表を囲み研修センターで昼食会となります。皆様、お誘いあわせの上、ご参集下さい。

6月15日

地上天国祭並びに信徒集会のお知らせ

地上天国祭終了30分後、執務棟会議室において、「聖地直結の会全国信徒集会」を開催いたします。ご参拝の皆様におかれましては、万障繰り上げの上、ご参加くださるよう、ご案内致します。

感謝奉告 ③

地軸を買いて働く明主様のみ力実感

古賀集会所 A T

今年のお正月二日、我が家ではいつもの年のように、息子は簡単なしめ縄を作って、田と畑に鍬入れの初仕事。私は初縫いで、台ふきを縫います。歳の餅をおろして焼いて、家族皆で朝食。箱根駅伝を見ながら、ゆつくりとした朝でした。

息子と孫たちは、寺へ新年の挨拶に出かけ、お昼前にはSさん(従弟)が尋ねてくるのが常でしたが、今年は来ませ



赤間宅感謝祭。右上が赤間建子さん

んでした。" 明日来るかな？" とのんびりしておりました。三日にも来ません。" 何かあったのかな" と心配しました。Sさんの住まいのマンションを訪ねる

と、玄関に管理会社の名がありましたので、電話してみました。すると「警察に来てもらいたい」言われて、すぐ交番に行きました。警察官二人で家の中を見て下さいました。「誰もいない」との事。"いつから行方不明なのか？" "どこに行つたのか？" "どこかで倒れていないか？" と悪いことばかりが頭をよぎります。警察官が消防署に連絡を取って下さり、ようやく暮れの三〇日、この付近で倒れていた老人が記念病院へ運ばれたことが分かりました。早速その病院を尋ねると、幸いな事に健康保険証がポケットに入っていて、Sさんであるということが判明。頭をひどく打つていて意識はないとの事でした。もちろん面会もできません。その日は、入院手続きだけして帰ってきました。意識がなくても生きていた事に感謝、助けていただいた事に感謝でした。すぐ明主様にご奉告し、お礼申し上げます。

七日は主治医との面談があり、酒の飲みすぎで肝臓が悪く、脳挫傷、外傷、くも膜下出血、左急性硬膜下血腫、右急性硬膜外血腫、右側頭骨線状骨折で意識ももうろうとした認知症状、「手術もしなければいけないかもしれません」と言われました。この時、"独り暮らしのSさんの面倒は、私がみてあげるしかない"と決心しました。

Sさんの娘(N)はブラジルにいます。日頃二人はオンラインで連絡をしているのを知っていましたので、すぐ国際郵便で手紙を出しました。速達でも10日以上はかかるそう

です。Nちゃんもオンラインがつながらないので心配し、日本のラインを調べて、私の番号を見つけて、ライン通話をしてきました。私は日本語、彼女はポルトガル語、むずかしい話は通じず、どうにもなりません。それで、私が日本語でラインをしたのを友人で日本語のわかる人に翻訳してもらおう事にしました。一七日、本部にご守護お願いしました。リハビリ専門病院へ転院予定でしたが、発熱があり、コロナにかかっていた。コロナの治療を受けることになりましたが、「熱が出て、毒素が溶けてよかった」と思いました。リハビリ病院に移ってからSさんは、お酒を欲しがったり、歩きまわったり不安定でした。お金の事とか、世話は誰がしてくれるのかと色々な事が気になり始めたようでした。それでも一歩前進です。Nちゃんとは通訳さんを挟んでライン通話しました。「私にできる事はないか」と申し出てくれました。そこで救世教の話をしました。救世教の信仰を通してお父さんの回復を祈ってあげてと頼みました。祈りなさいとは日頃言っただけでしたが、信仰の話は初めてです。素直に受け入れてくれました。すぐ、本部に連絡を取っていただき、いづのめ教団との連携のもとブラジルの教会を調べてもらい、Nちゃんに知らせました。するとNちゃんが八年前勤務していたホス建設有限会社はグアラビランガ聖地の建設に携わっていた会社でした。不思議な深いご縁を感じ、明主様のお導きを感じました。すぐ教会を尋ね、現状を話し相談したのだと思います。天

津祝詞をあげてお祈りしていると知らせてくれました。そして私もすぐ、Sさんの入信手続きを進め、そして、祖霊祭祀の申し込みをさせていただきました。病院では、認知症の入院は身近な人の承認が必要で、病院が決まらず困っていましたが、糸島の病院が入院を許可してくれました。「おひかり」は首にかけることを許可してくれませんでした。私の家の御神前でお預かりさせていただいています。それでも、神様のみもとでの療養が実現しましたので安心です。Nちゃんも入信し教会でお祈りするようになって、考え方が変わったのがよく解かると言っています。ブラジルの先生方のご指導に感謝です。明主様の教えが世界的であることも実感しています。Nちゃんを信仰に導いてくれたSさんの働きも大きかったです。Nちゃんはこれからの人生を信仰中心の生き方で過ごしていきたいと話しています。

四月九日の九州合同月次祭には、Sさんに「おひかり」をかけて出席していただきました。その翌日から熱が出て、三週間寝たままでも目も開けない状態でしたが、二九日の面会の折には熱も下がり、すつきりした顔になっていました。面会も思うようになりませんが、遠隔浄霊をしつかりさせていただきます。明主様に守られてできるお世話です。しっかりと腹を決めて事に当たれば、気持ちよく楽しくさせていただきます。

明主様、本当にありがとうございます。

シリーズ 明主様(4) “少年期の思い出”

明治中ごろの小学生の服装は、もちろん今のような洋服ではなく、縞の着物に紫紺色をしたメリンスの兵児帯を締め、紺の前掛けをしていた。履物は、靴の代わりに下駄や板草履であった。学校の運動会の時でさえ、草鞋か足袋裸足で走ったという。運動会はといえば、名門校といわれる浅草小学校でさえ、運動場が狭いので、上野公園の広場を会場にしたとさえ伝えられている。

テレビもラジオもないころのことゆえ、子供たちは学校から帰ると、なにがしかの小遣いを手にして、近所の駄菓子屋へ駆けつけ、いわゆる一文菓子などを買って食べながら遊ぶ毎日であった。(中略)

橋場の近辺にはお寺が多かった。教祖の家にはほど近い今戸の長昌寺などは境内が広く、界隈の腕白連がその中をおがもの顔に走り回り、日が暮れるまで賑やかな子供たちの遊び声が絶えなかった。病弱であった教祖は、近所の子供たちが誘っても一緒に遊ぶうとはせず、近くの不動の社の廂の陰で、本を読んだり、絵を描くことが多かった。それだけに、元気な子供が走り回ったりする様を、どんなにか羨ましい思い”で眺めやったことであろう。(中略)

教祖は、幼年期において、赤貧洗うがごとき家庭に育つ

たので、貧のつらさ、苦しさを世相一般としてではなく、身につまされる実感として強くその心に刻み付けたことであろうと思われる。わが身はもちろん、周囲の人々の中にも、貧しさゆえの苦しさ、悲しさを直接見たり聞いたりして、心を痛めることが多かったに違いない。

しかし、教祖はこうした体験に出会いながらも、それらに対し、ただ心を痛めるだけではなく、直面する苦悩や逆境を心の糧として生かし、天性の人間愛をさらに一段と磨きあげ、一層の幅と深みを人格内に加えたのであった。その行き着くところは、後年、こうした世の中にいつの時代にもある貧や苦を、いかにして解決し、転換していくかの化他(他人を救いとる)の行の究明に高められたのである。(中略)

一家が千束町に住んでいたころ、近所に二人の老人がいたが、教祖はこの二人から、犯した罪の報い、人間の運命について、大変鮮烈な印象を受けたのであった。

一人は教祖の父親・喜三郎の商売仲間の、花亀という老人であった。この男は当時浅草一と言われた道具屋であった。花亀という名は「花川戸に住む亀さん」という表現を縮めて付けられた渾名である。この老人は六〇歳ほどの時に完全な盲目となってしまった。

花亀について教祖に語ったのは父の喜三郎であったが、その中で、それがまったくの天罰であると言ってつぎのような因縁話をしたのである。

それというのは、花亀がまだ中年のころ、静岡のある寺の住職が、浅草寺の境内を借りて自分の寺の本尊の開帳を企画した。多くの参詣人から金を取って本尊を拝観させようとしたのである。ところが予想に反して拝観者が集まらず、住職は多額の借財を作ってしまった。出先のことゆえ、持ち合わせの金もなく、他に方法もないので、やむをえず本尊の観世音菩薩を抵当に金を借りて、金策のために国へ帰ってしまった。その時、本尊と引き換えに金を貸したのが花亀であった。金を持ってくるまでの抵当にという話であったが、花亀はその約束を破って外国人に売り払ってしまったのである。

何も知らない住職は、こしらえた金を持って、花亀の所へ戻ってきて本尊を返してくれるように頼んだ。ところが花亀は、「そんな覚えは全然ない。何かの間違いだろう。」と頭から取りあわなかった。ついに進退窮まった住職は、花亀を呪いつつ、その軒先で首をくくって死んだのである。花亀はその後、店を一段と大きくしたが、後になって盲目になつてしまった。そのうえ、一人息子が大酒飲みで、数年の間にさしもの資産をみな飲みつぶし、家出をしたまま行方知れずになつてしまった。

こうして花亀は急速に零落し、親戚などの援助でようやくその日その日を暮すありさまとなつた。教祖は、老いた妻に手を引かれ、町を歩いている花亀の姿をたびたび見かけたのであつた。

いま一人は、やはり教祖の家の近くに住む、経師屋の銀次郎、通称「経銀」という老人の話である。経銀は腕のたつ職人であつたが、この男は贋絵を描くのが得意な絵描きと組んで、できあがった贋の絵にうまく古さ加減をつける贋物作りの名人であつた。教祖はよくその家へ遊びに行つたが、その家の中で、けつして他人を入れない一部屋がある。そこが秘密の作業場であるとのことであつた。ところがこの経銀もまた、六〇歳のころから盲目となつてしまつたのである。父の喜三郎は経銀の失明の原因もまた、他人の目を欺いて不正の金を手に入れた報いであると教祖に語つたのである。

おのれの犯した罪ゆえに、悲惨な晩年を送ることになつたこれら二人の老人の姿は、これから生い育つて、多くのものを学び、社会に出て行こうとする教祖の、柔軟で多感な心に、人の罪に対して下される天罰がいかに恐ろしいものかについて、忘れ難い印象を残したのである。このことは、まさしく天罰の生きた見本を目にし、耳にした鮮烈な体験である。それは、父のさりげない話の中から、終生消えることのない教訓となつて生かされていく。その意味で、この父は、よき人生の教え主でもあつたと言えるであろう。

(次号へ続く) 『東方之光』(上巻)より

「奉仕と貢献」を人生のスローガンに

ジェフェルソン・ベント・カンジド

皆様、おはようございます。私は一二年前に入信が許され、現在はバールマンサ教会（リオ州）に繋がるレズンデ浄霊センターで世話人の御用を頂いております。本日は皆様に、私が御神業に尽くすことを真に決意したこの三年間に許されたご守護についてお話ししたいと思います。

信者だった父方の祖母の勧めで「おひかり」を拝受したのは、私が16歳の時でした。当初はセンターで青年部の活動や布教のお手伝いをさせて頂いておりましたが、御用奉仕を始めて二年程が過ぎると、世の中の新しいことを知ってみたいという好奇心に駆られ、信仰の道から外れていってしまいました。センターに通わなくなり、気づいた時にはもう「おひかり」さえ掛けなくなってしまうていたのです。

また二〇一七年に結婚した妻とは当初から喧嘩が絶えませんでした。私は気性が激しくワガママで、その態度にはしばしば辻褄の合わないところがあり、妻を

愛してはいるのに妻の幸せのために行動するということができなかったのです。私のこうした態度は周りの人たちを大いに悩ませ、徐々に悪化していった夫婦関係は破綻寸前の状態に陥っていました。

それに加えて職場でも上司や同僚たちとの人間関係に悩んでいましたし、高い給料を貰っているにも関わらず金銭管理が杜撰だったせいで生活苦にも喘いでいました。「望んだ人と結婚し、良い会社に勤め、健康にも恵まれているはずなのに、なぜ自分は幸せを味わえないのだろうか」と悩みつつも、八方塞がりの状態を打破する力もなく、どうしたら良いかただ思い迷うだけの自分だったのです。

机の引き出しを探っていて、そこにしばらくしまひ込んであった「おひかり」を偶然見つけたのは、そんなある日（二〇一八年八月某日）のことでした。そのとき私は明主様と浄霊のことを思い出し、「これで事態は改善されるかもしれない」という大きな希望を抱きました。そして「おひかり」を再び首にかけた瞬間、「ここから人生を挽回できる」という確信を得たのです。

センター長にお電話すると、先生はその週の内に早速私の家に来られ、いろいろとアドバイスをくださいました。私はそうしたアドバイスに従い、御教えの拝読や感謝献金を再開し、教会の朝拝にも参加するようになりました。また清掃奉仕など、どこでも必要とさ

れるところでご奉仕し、浄化を頂いている方がいれば、浄霊訪問もさせて頂くようになりました。

加えて妻にもご浄霊をお取り次ぎするようになり、自宅に常時花を飾る習慣も始めました。こうして私が自らの心言行を改め、いつも周囲に心を配る穏やかで責任感のある人間になると、短期間のうちに多くのご守護を頂き、少しずつ浄化を克服していくことができました。

その結果、夫婦間のいざこざが激減し、職場の雰囲気も和やかになっただけでなく、計画的な金銭管理もできるようになりました。そのうえ信仰も深まり、明主様の御神業にもっとお使い頂きたいという気持ちも芽生えました。

大きな奇蹟が許されたのはそんな折、二〇一八年二月一日、バーラマンサ教会の青年研修会へクルマで向かっていった時のことでした。前を走っていた車両が跳ね上げた落下物が私のクルマに直撃したのです。およそ3kgほどのその物体は凄まじい勢いでフロントガラスを突き破り、車室側面の中央辺りにぶつかりました。その時は五人が乗車していましたが、大神様と明主様に護られ奇蹟的に一人の怪我人もありませんでした。命が救われたことに感激した私はそれ以降「奉仕と貢献」をモットーに、いつでもどこでも全力でご神業にお仕えすることを決意したのです。

そしてその後私は「救世信仰講座レベル」の他、救世神学大学でも世話人講習を受講しました。また会社の昼休みには同僚にご浄霊をお取り次ぎするようになり、浄霊訪問の取り組みも強化して、私が暮らすレゼンデ市の隣町（イタチアイア市）でも信者さんのご家族やお友達のお世話を始めました。

こうしたお世話の取り組みを通じて、嬉しい体験も数多く許されました。二〇一九年六月頃、頭が痛いと言う同僚に少しご浄霊をさせて頂く機会があったのですが、すぐに気分が良くなった彼が救世教のことに興味を示してくれたため、後日私は彼の家を訪ねることになりました。なお訪問の日時については、他の宗教を信仰していたご両親に配慮し、ご両親が在宅されていない時を選びました。

ところが訪問したその日、なんとそのご両親が予定を変更され、私たちが教団誌を輪読している最中に、ご家族の方を二人連れて帰宅されたのです。私は最初戸惑いましたが、心の中で明主様にお縋りするうち、「これは霊界が準備してくれたチャンスに違いない」と理解するようになり、「一緒に読みませんか」とご両親に声をかけてみました。すると、皆さん御教えについて興味津々にいろいろ質問をしてくられ、気がつけば、辞去するまでに全員にご浄霊をさせて頂いていたのです。そしてそれ以降、同僚のお母さんはセンター

に通つてご浄霊を頂くようになり、聖地にも参拝され、やがて「おひかり」を拝受されました。

また同じ頃、両親と兄(弟)と妻の他、その町で三人の「お導き」が許され、二〇一九年一二月には長男を授かりました。息子は私たちの人生の新たなステージを祝福するために生まれてきた―そんなふうには思えてなりません。

ところが翌年になると、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う自粛要請の影響で、私は他の多くの方と同様職を失ってしまいました。その頃妻は子育てに専念したいと既に離職しており、我が家で唯一の収入源が断たれてしまったことに最初は正直ショックを受けましたが、「その会社での使命は終わった」と明主様が仰せになっているのだと理解し、心身共に向上が許されたことを感謝しながら会社を去りました。

するとそれから僅か二日後に自分の専門分野で働けるチャンスが訪れ、解雇されたその週に新たな職に就くことができました。またしても大きなご守護を頂き、私はほつと安堵の胸をなでおろしました。

こうして大きなご守護が幾つも許されてきたことを自覚するなかで、私は「神業奉仕をもう一段高い次元へと進化させ、自宅を『光の拠点』にして一人でも多くの人を救っていかなければいけない」と思うようになりました。

そこでセンター長にその旨をお話しし、二〇二一年五月、大神様、明主様、祖霊様への深い感謝を胸に自宅にご神体を奉斎させて頂くこととなりました。朝夕の参拝時に見様見真似で小さな手を合わせる一歳半の我が子の愛らしい姿や、ご神体をいつもきれいにしてくれている妻の優しさを見ると胸が熱くなります。今は夫婦仲も深まり、円満な家庭が築かれつつあることを実感しています。

我が家に天国家庭を築くお許しを頂きましたことを大神様と明主様に心から感謝いたします。そしてこの天国が一つでも多くの家庭に許されることを願いつつ、これからも明主様のお道具として御教えの普及と浄霊のお取り次ぎに誠心誠意励んでまいりたいと思っております。ありがとうございました。



「ゼロポイントフィールド仮説」は神さまの世界③

高頭 和生

二ヶ月にわたり、「ゼロポイントフィールド仮説」と神さまの世界を、田坂広志著「死は存在しない」（光文社新書）をもとに、考察してきました。最終回は、この本のタイトルである「死は存在しない」ということを掘り下げてみます。結論を一言でいうと、肉体は死んでも「意識」は生き続けるといわれます。

前回は、意識には五段階あり、自我（エゴ）中心の表層意識が日常であり、日々の参拝や浄霊を習慣化することや、感謝の心を積み上げること、無意識の想念が浄化され、静寂意識、無意識、そしてさらに深く、ゼロポイントフィールドに繋がって行くことを学びました。ゼロポイントフィールドとは、すべての情報がある大きな意識です。そこは四六億年前に生まれたこの地球の全てであり、地球上に誕生し生存した生き物「すべての生命の意識」がある地球意識です。さらに一三八億年前に誕生した宇宙で起きた出来事すべてに繋がる宇宙意識でもあります。私たちが信じる主神とは、この宇宙意識と同じだと解釈いたします。

この宇宙意識は誕生直後から、宇宙で起こる全てのことを記憶し、成長し、進化し続ける存在であり、それは宇宙から生まれた私たち人類を含むすべての意識の成長と進化に他ならない。私たちは「意識の成長」の為にこの世に生まれて来たのだと書かれています。私は、人間は神さまから生まれ、神さまと一緒に成長と進化をすることが人生の目的であると解釈いたしました。

そして人生を終えた死後のことを著者は、「人間は死後、ゼロポイントフィールドにおいて、自我意識から人類意識、地球意識という意識の状態を経て、最後は宇宙意識へ拡大し、この宇宙意識と合一して行く」と述べられています。私たちの意識は、いつか宇宙意識へ戻って行くという事なのです。最先端の宇宙論では、この宇宙は一三八億年前に、ひとつの「量子真空」から生まれたということがわかっていると、前々回に学びました。これは科学的にわかっていることなのです。故に私たちの意識は、宇宙意識から生まれたことになりました。宇宙意識（神さま）が成長と進化をするため、人類を造り、一人ひとりに個別意識として「私」という自我を持たせ、人生という限定された時間の中で、様々な課題に向かい合って生きること、成長と進化をしているのだと思うことができます。

科学者である著者は、この本の最後の章で次のよう

なことを書いています。

いま、人類の現実を見るならば、地球環境の破壊はとどまることを知らず、気候危機は、深刻化の一途をたどっている。そして発展途上国での人口増大が進む一方で、地球上の資源枯渇も急速に進み、食料危機とあいまって、人類の生存を脅かしている。さらには、世界中で戦争や紛争が多発し、難民が増大するだけでなく、無数の人々が飢餓の危機に直面している。く中略くいま、最も求められているのは、「人類全体の意識の変容」であり、「人類の価値観の転換」であろう。そして、その「意識の変容」と「価値観の転換」を成し遂げるための、最も重要な課題は、実は、永年続いてきた「宗教」と「科学」の対立に終止符を打つことであり、「科学」と「宗教」の間に横たわる谷間に、「新たな橋」を架けることであろう。それは言葉を換えれば、「科学的知性」と「宗教的叡智」が結びついた「新たな文明」を生み出していくことでもある。

とあります。

工学博士である著者の田坂氏が、最先端の科学を研究してたどり着いたこの結論は、永年、物質偏重の現代の中で、布教活動をしていた私たち救世教信徒にとって、科学の側から歩み寄ってきた奇跡的な出来事であり、「地上天国は間近にきているよ」という明主様の想いを感じざるを得ません。そして現在は、神さまの光

は一気に強まり、神さまの御経綸が勢いよく進んでいるように思えてなりません。この本は科学的に証明されていることを中心に、著者の仮説も含まれているものの、書かれている内容には、明主様のみ教えと符合する点が多く見出せます。大きくとらえると、最先端量子科学が「宗教的神観」の裏付けをし、「目に見えない世界」という宗教的概念を証明する研究が、今まさに進められているということですが、「21世紀は神さまの時代」といわれています。神さま中心の生き方が求められる時代です。私は、この本を読んでから、改めて明主様のみ教えを読み直すと、今まで以上に立体的に受け止めることが出来るようになりました。

私たちが地上天国建設という目標を持ち、自分のまわりにいる病気の方、苦しんでいる方、困っている方々に寄り添い、その人の幸せを願い、取り組む浄霊をはじめとした救いの活動は、私たちの自我を利他の魂へと誘い、地球意思、宇宙意思へと導かれる最高の営みだと思えます。自然と自我が抑えられ、利他の愛が高まり、利他の意識を広げることにつれて行く、それが私たちの生まれてきた目的であり使命であると強く信じることができました。

この連載は「明主様を求める」ひとつの切り口として紹介しています。会としてみ教え解釈の固定化を図る意図はありません。寛容にお読みいただければ幸いです。(編集者)

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

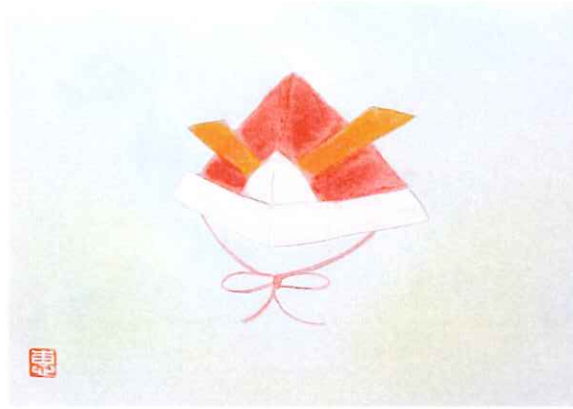
〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



見守りの兜